

津波関連遺構の歴史と意義 観光資源の可能性秘める構成文化財

文化庁は今年5月、和歌山県広川町が申請していた『百世の安堵(あんど)』(津波と復興の記憶が生きたる広川の防災遺産)を日本遺産に認定しました。津波関連遺構が評価されたのは、2015年度に日本遺産が創設されてから初めて。構成文化財を活用したまちづくりとともに、観光資源としての可能性も注目されています。



津波で町に漁船が流れ込まずに濱口梧陵によって植えられた広村堤防の松



安政の津波襲来時に危機を知らせた法蔵寺鐘楼。寺には避難民に貯蔵米を供出した蔵も



11月5日の「津波祭」では、地元子どもたちが「土盛り」で堤防を補修。11月5日は2015年に「世界津波の日」に制定



田んぼの稲を刈り取った後に稲束を積み上げた稲むら。これに火をつけ暗闇の中で避難する人々の灯りとなりました

防災文化の原点は「稲むらの火」

江戸時代末期の1854年(安政元年)11月5日、広川町を襲った「安政の南海地震」は、やがて暗闇の町に津波をもたらします。津波を察知した実業家・濱口梧陵は、水田に残された稲むら(脱穀後の藁の山)に火を放ち、高台の寺社に逃げる人々の明かりとし、多くの命を救いました。その顛末は、『稲むらの火』として小学校の教科書などにも掲載されてきています。

津波で被災した人々は、行く末を案じて町を離れようとしていましたが、濱口梧陵は、抜本的な津波対策として、新たな堤防の築造を計画。「築堤の工を起して住民百世の安堵を図る」と語り、復興の象徴として築堤に力を注ぎました。4年の歳月をかけて山から土を運び、突き固めた堤防の高さは5メートル、長さは600メートルに及びます。堤防は津波の衝撃を和らげるために湾曲し、港から町への避難を容易にするため斜面を緩やかに築きました。堤防の前には、津波で町に漁船が流れ込まないように松を植樹し、堤防の補修費用を賄うため、蝋燭の材料となる蠟も植えられています。

新規需要開発へ旅行会社に期待

現在多重防衛システムが構築された海岸に加えて、堤防に沿った町並みには、豪壮な木造3階建ての楼閣や、重厚な瓦屋

根に漆喰や舟板の外壁を持つ町家が軒を連ねます。これらが面する通りや小路は高台に延びており、避難を意識した町が築かれてきたことを伝えています。江戸時代の人々が津波の被害から復興させた町並みは防災遺産として世代から世代へと災害の記憶を伝え、今も暮らしの中心に息づく「防災文化」を地域に根付かせたのでした。

広川町教育委員会の平井正展班長は、「日本遺産のストーリーと構成文化財を地域の観光資源としていくために、まずは『稲むらの火』の認知度を高めるとともに、隣接エリアとの広域連携による旅行動線づくりも視野に入れていきたい」と説明。「教育旅行や研修視察旅行などを軸に、地域への旅行需要の創出を図りつつ、一般的な旅行のテーマや素材としては地味かもしれないが、防災・減災ツーリズムなどの動きも出てきている中で、新たな旅行需要の開発に向けて旅行会社の手腕に期待したい」と語っています。



重厚な本瓦屋根が連なり、漆喰や船板の外壁、窓格子が印象的な街並み



安政の津波で避難場所となった広八幡神社